

# 艶容女舞夜

七

下巻

酒屋の段

〔解題〕 安永元年十二月廿六日から豊竹座興行。作者は竹本三郎兵衛・豊竹應律・八民平七・元祿八年十一月

六日の夜、大阪長町四丁目の美濃屋平左衛門の養女おさん事藝名三勝（湯女とも、女舞ともいふ）と大和五條新町の赤根屋半七とが大阪の下難波村の千日墓所南側の石垣の下で情死した。町中の評判となつたので、大阪の岩井半四郎座では早速これを仕組んで翌年の正月二日から「茜の色揚あざなほ」の外題で、美濃屋平左衛門に岩井半四郎、みのや三勝に花井あづま、赤根屋半七に杉山勘左衛門、おつうに岡本松之助といふ役割で演じて大當りを取つて、百五十日間興行を続けたといふ。これによつて三勝半七の心中はいよ／＼名高くなり、京都の都音頭としても歌はれ（寶永元年刊行の落葉集所載葛山四郎兵衛作三勝心中）、また「三勝心中」と題した歌祭文としても流行した。

かやうな傳統と人氣とを有つ二人の情死の廿五回忌を當込んで始めて淨瑠璃に作つたのが紀海音の「笠屋三勝廿五年忌」である。本曲の著作上演年代に關しては、情死後十五年日の寶永六年八月であるとするもの（外題年鑑）、享保元年とするもの（南水漫遊）などがあるけれども、廿五年正當とすれば享保四年となるわけで、疑問の餘地があるやうに思はれる。本曲では美濃屋三勝を寛永頃の名高かつた女舞の座元笠屋三勝に附會して、二人の情死の原因は、三勝の伯父平左衛門に四貫五百日の金を貸した今市の善右衛門が、その金のかたに三勝を奪はうとするが、勘當の身の上の半七はこれに對抗し得ないが爲であるとし、又半七は國許におすがといふ貞節な女房があり、おつうは伯父の許で三勝の母と共に養はれて居るといふ風に仕組まれて居る。

この改作として出たのが「浮名茜染五十年忌」と角書かどがきをつけた春草堂の作「女舞劍紅楓めづまき」（延享三年十月）である。本曲では笠屋三勝をまた元の美濃屋三勝とし、その兄に勝次郎といふ放蕩のために勘當された男があつて、それが後に半七の罪を引受ける役廻りに立ち、又半七の父を半兵衛とし、半七の許嫁の妻お園は既に三年越し半七の實家に引取られて居るが、半七はお通まで儲けた三勝とのみ深く契つて居る。そして半七は廓の意地で誤つて悪手代長九郎を殺して、遂に三勝と共に情死するといふ風に仕組まれて居る。この筋立を受けて更に新工夫をこらしたのが「艶容女舞衣」で、お園の父宗岸を點出した事、お通の守袋から遺書が出て、それ

を讀む一同が悲歎にくれる事、餘所ながら最後の暇乞に來た二人が死なずに助かるやうになる事などが特に變つた趣向で、それがこゝに收めた下巻の酒屋の段として仕組まれて、全篇の山となつて居るのである。

へこそは入相の。フシ鐘に散行く花よれ去なれたからは。こちの内に用はな管。コリヤ宗岸が一生の仕損ひ。と悔りも。あたら盛りを獨寝の。お園を連い管。何の爲にござつた事。と針侍んでも跡の祭。園めも晝夜泣き悲しみ。れて父親が世間構はぬ十徳に。丸い頭つ詞に妻は氣の毒。調ア、これいの親朝夕も進まねば。もしや病が發らうかの光さへ。ヨクリ子故に。フシくらむ黄父殿ホ、ホ、ホ、。イヤモ人様にと。見て居る親の心は闇。おれも天満昏時。地主の妻は灯をともし表をしめ追従いはね偏屈なちの人。必ずお氣に年古う住んで居れば。人に理窟もいにいそくと。出會ひがしらに。調ホに障られて下さりますな。此間は。嫁ふ者なれど。誤りは詫びねばならぬと。ホ是はく宗岸様。そちらに居やるは女の歸つて居られました。いかいお世年寄の面おし拭うて來ました。何かのお園ぢやないか。アイ母様。お變りも話でござりませう。何のく。半兵衛事は了簡して。今迄の通り。嫁ぢやとござりませぬか。地といふ挨拶もどこ殿の立腹は皆尤も。三勝とやらに心奪思うて下され。コレ頼みます御夫婦。地やらに痴持つ足の踏みどさへ。低き敷はれ。夜泊り日泊りして。女房を嫌ふとあやまり入つたる挨拶に。お園もう居も越えかぬ。宗岸は遠慮なく。調半七。所詮末の詰らぬ事と。無理に引ちく。フシ手をつかへ。地父様の一半兵衛殿お宿にか。地と娘を連れて打つ立て去んだのは。娘に引けを取らず徹で。無理に連れられ歸りしが。一旦通れば。妻は門の戸引立て、サアく。まい爲おれが氣迷ひ。それから思案す殿御と極つた半七様。嫌はれるは皆わ先づお上り。なされませと。フシ奥底もるに付け。店も倭も。一旦嫁にやつたたしが不調法。鈍に生れた此身の科。なき詞の内。地それと聞くより半兵衛娘。嫌はれうがどうせうが。男の方が。調今から随分。お氣に入る様に致しませう。一間を出づるしぶく顔。調娘を連れら追出す迄。取戻すといふ理窟はないせう程に。やつぱり元の嫁娘と。地お



晚山の口で。善右衛門を殺したは。茜あかねしたれば。半七が脹はらがるなら。ハテ尼岸殿と。跡は詞もないじやくり。妻も屋の半七と噂を聞いた時は。驚くまいか悔りせまいか。膝も腰も抜果てしが。香花かうかなりとも取らして下され。コレ手の口くちあけし如くなり。半兵衛涙の内思へば。不孝者。よい時に勘當さしを合はして頼みます。詫言わごころが叶はねば。よりも。持病の爲に咳せき入つて。お園がやつて。親に難儀のかゝらぬは。まだ引放されたと突詰めて。短慮な心も出顔かほを打守り。何から何迄氣をつけて。此上の幸福しあわせ。と思うたは他人の了簡りょうかん。しをろかと。案じ過して夜の目も合は孝行にしてたもる。こんな嫁が尋ねた違ちがうたこなたの縛り細こま。科極しやくごくまつた半七が命。一日なりと延ばしたいと。人思ふおれが因果。こなたの細目も半七間の人の嫉鑑ねたみ。半七が事は思はぬが。殺しの科を身に引受け。細かゝつたこが。科人になつたら猶可愛かる。たとそなたに別るゝ半兵衛は。よく。不あなたの心は。眞實しんじつ心に子を思ふ親の誠へ又勘當が定ぢやうでも。久離切つたが誠で仕合せ。去なせとむない。歸しとむないと。知れば知る程。宗岸が任損しんそんひ。半七が身の難儀。こなたも勘當して了ぬ血筋の親。おれもこなた程はなけれ若後家わがごけ。おりやそれが可愛い。いとしひ。おれも娘を取戻したら。親にかゝども娘は可愛い。まして勘當はせぬ娘。うおぢやる。それで詫言聞入れぬ。了る首綱くびづなもなく。よいことしたと世間か愚痴ぐちなと人が笑はうがおりや可愛い。簡して呼戻さぬ。コレ嫁女。必ず惨あついら。賞める人もあらうが。親と成り。不便ふべんにござるが。コレ。聞入れてたと恨んでばしたもんなや。一人の悴せは男となるが。大抵たいてい深い縁かいなう。べ半兵衛殿。是まで泣かぬ宗岸が。お尋ね者。明日より誰を力にせうぞ。斯ういふ時宜ときぎになつた時は。賞められ堪たへに堪へし溜たくを。たくしかけたる孝行にしてたもつたが。今では結句むすびご。るより笑はれるが親の慈悲。片時へんじも早はや叫なひ泣き。我強がう生れし半兵衛も。男おとこ恨めしいと咳上げ。咳入る男の脊せ。うと連れて來た心はの。一旦嫁におこの心根思ひやり。オ、道理ちや。宗すけ擦するお園も。正體なく伏し。沈しづむこ

そ道理なり。半兵衛やう／＼顔を上で了うたら。斯うした難儀は出来まい。小母々々。地とお園が膝に寄添  
げ。言はねばならぬ事もあれど。孝もの。お氣に入らぬと知りながら。未練ふ子の。顔見て悔り抱き寄せ。調ヤア  
行な嫁女の手前。胸につまつて言ひに。私が輪廻ゆる。添臥は叶はずともお。そなたは美濃屋のお通ぢやないか。爰  
くい。宗岸殿。奥の間で言明かさ。傍に居たいと辛抱して。是まで居たのへはどうしておぢやつた。地ヲシと不思  
コレお園。そなたをさら／＼嫌ふぢや。がお身の仇。今の思ひに比らぶれば。議ながらも抱上ぐれば。地半兵衛宗岸  
ない。氣に懸けてたもるなや。勇殿へ一年前にこの園が死ぬる心がエ、付か。母親も。一間の内を轉び出で。調オ、  
話す内。暫く爰に。地と三人はしを／＼。なんだ。堪へてたべ半七様わしや。コレ／＼嫁女。忝いその心。障子の内  
奥へ泣きに行く。ヲシ心の内ぞ哀れな。様の思うて居ると恨み。カンつらみは。で聞く度に。拜んでばつかり居たわい  
り。地ヲシ跡には。園が憂き思ひ。か。露程も。上夫を思ふ眞實心なほ。いや。の。禮いふ事もたんとあれど。心の急  
れとして。烏羽玉の。長地世のあぢき。増るヲシ憂き思ひ。調明日は疾うから。くは此子の事。美濃屋のお通と言はし  
な。身一つに結ばれ解けぬ片糸の。緑。父様に。又連れられて天満へ去に。半やつたは。半七と三勝の。アイお二人  
返したる獨り言。詞今頃は半七さん。七様のひよつとした。はかない便り。の中に出来た。お通といふは此子ぢや  
どこに如何してござらうぞ。地今更返。聞くならば。思ひ死に死ぬである。とて。わいな。ヤア／＼親父殿聞かしやつた  
らぬ事ながら。わしといふ者ないなら。も浮世は立たぬ覺悟。嫌はれても。ちよか。オ、聞いて居る。その又お通を。  
ば。勇御様もお通に免じ子までなした。内。此家で死ねば後の世の。もしや契り。ナ、何で捨子にして。こちへおこし  
る三勝殿を。疾くにも呼入れさしやん。の綱にもと。地最期を急ぐ心根は餘所。た。こりや譯があらう。喚懐かどこ  
したら。半七様の身持も直り。御勘當の見る目も。ヲシいちらし。地ヲシか。ぞに書いた物でもないか。早う尋ねて  
もあるまいに。思へば／＼この園が。る哀れも知らぬ子の。泣聲に目や覺し。見や地といふ内に。わくせき明ける。守  
上去年の秋の煩ひに。いつそ。カン死んけん。一間を出でて。詞乳も乳がもみ袋。内よりばらりと落ちたる一通。取

る間おそしと、フシ封押し切り。詞ヤアの難儀。人を殺せし身と成りゆへば。ウ半兵衛殿。宗岸殿。思ひ廻せば廻す何ぢや書置の事と書いてある。ヤア思ひ設けぬ御別れ。エ、そんならやつ程。チエ、口惜しいわいの口惜しいわい。コレ、嫁女。そなたのよい目で。ぱり半七様は。オイナウ嫁女。善右衛門を殺しましたわいなう。ハア。あの。迷ひ行く小夜千鳥。ナホシ共。無慚やちやつと読みや。アイ。ナ。門を殺しましたわいなう。ハア。あの。度度契りて親子となる父の御恩。善右衛門といふやつが。大抵や大かたな半七は。今宵限りの命ぞと。三勝伴は山よりも高きとの世の教へ。我が身。悪い奴ぢやないわいの。あんな悪者で。ひしをく。と。心にかゝる我が子の顔。にも弁へ居りゆへども。その御恩も得も喧嘩兩成敗。我が子の命を解死人に。名残にせめて今一日と。フシ共に戸口送らず。儘ならぬ義理にからまれて。とらるゝと。思へば。宗岸殿。口惜に夜の鶴。地内にはそれと白髪之母。心にもあらぬ不孝の罪。御赦し下されしいわいの。地無念にござると述。心ならねど書置を。又取上げて讀む文。わけて母様の御養育。申し。懐涙。見聞くお國は以前の剃刀。南章。詞人を殺し一日も生き永らへる所。お前の事とござります。ようお聞きな。無阿彌陀佛と覺悟の躰。是はと驚く母存はなくゆへども。お通と申す娘一人。されませえ。オ、よう聞いて居ますわ。宗岸。叶はぬ手にも半兵衛は。やう。御座ゆて。殊にかよわき生れつき。不いの。聞聞いてゐるさの障子より洩れ。押へてコレ嫁女。詞年寄りばかりを跡に。便さ餘る親心。それに心が惹かされて。出づる月は牙ゆれど胸の闇。詞エ、時置き。死なうとは胸窓ぢやわい。今日まで永らへゆへども。所詮助からも時と隣の稽古。そして其跡は何と書エ、是が死なずに居られませうか。放ぬ身にゆへば。思召しも願みず。お通いてあるぞ。アイ。母様の御養育。海して殺して下さんせ。オ、娘尤もぢやを遣はしゆま。私の小さく成りしとより深き御恵み。親父様の御機嫌悪し。くわい。ア老少不定の世の中。思召され。く。ドレ、婆見しやい。い時には。陰になり日向になり。幾千と。聞流したも今身の上。水々としたの。エ、私の小さく成りしと思召万のお心遣ひも。泡と消え行く我が身。若い者。義理に逼つて死ぬるとは。ナされ。御養育の御世話の程。くれ。

頼み上げい。子を持つて親の御恩を知ると。お通が不便さいちらしさに。お二人様の御恩の程。猶更この身に泌みこたへ。有難く存じ奉りい。又々心がかりは親父様の御勤當。相果てい跡にても。お赦し下されい様。母様宜しう御取成し。これのみ黄泉の障りに御座い。〃。オ、道理ちや〃〃〃。可愛やと泣く聲洩るゝ表には半七が身にこたへ。かゝる歎きもわれゆゑと思へば今更そら恐しく。身を悔んだる男泣き。袖や袂を嘴みしめ〃。泣音とどむる愛思ひ。泣く〃取上げ書置の。讀むが猶涙。泣く〃。未來は未來ぢやが。一日なりと此世でつて。定まる夫一人を頼みに思ふものしか愛想らしい詞もかけず。終に一度の添隊もなくいへども。その色目も致が讀みませう。イエ〃私に讀まして

辛抱なされい段。山々嬉しく存じ〃。是は又片意地な。こつちへおこせ。イ今迄すげなう致せし事も。さら〃嫌エ〃どうぞ讀まして下さんせ。ア、三勝とは。そもエ〃どうぞ讀まして下さんせ。ア、コリヤヤイコリヤ。其様に引張つたら。互に退き去りもなエ、モ破れるがな。兎角不孝の我等に儲けし中にいへば。互に退き去りもなし。死後には嘸やお二人や。宗りかたく。それ故疎遠に打過ぎ〃。し〃へども。死後には嘸やお二人や。宗かし夫婦は二世と申す事もいへば。未岸様の御歎き。随分々々力を付け。此來は必ず夫婦にて〃い。オ、コリヤ身に代つて御孝行になされ給はるべく誠か半七様。ほんまの事でござんすか。い。申し残したき事どもは數々にいへいな。コリヤヤイ娘。未來は夫婦と書い〃。涙に字性も見え難く。あら〃惜てあるかいやい。アイナア。未來は夫しき筆止め申しい。只々お通が事のみ頼み上げい。此上は。亡からぬ跡のお婦と書いてござんすわいな。オ、それ金佛。南無阿彌陀佛〃〃〃。讀はマア。いつちよい事が書いてあるの。みも終らず宗岸親子。また伏沈めば半女夫にしてやりたい〃。何としてマ兵衛夫婦。お通を中に抱き上げ。初にア此半七は。善右衛門を殺しましたぞ。孫の顔が見たいと。心に思へど世間の義理で。是まで逢ひも見もせなんだ。ドレ〃娘。もちつとちや。ドレおれ祈ういふ事と知つたらば。顔見ぬ内が

増しであつた。愛らし盛りの此お通。なや。不孝を赦させ給はれと。悔み歎ばはつて。地庄九郎に繩をかけ。立出半七と一所どに暮すなら。よい楽しみであらうもの。コレ婆見やいの。アレ何にも知らず。手打てうちやあばどばつかり。ぬ縁言くちご。親父様の御繩目。早うほどくは賊。召捕りに来りし所。一昨夜半七にオイノ。こりや孫よ。モウ父も母もな身の最期。イザく急がんサアおちや殺されし由。即ち善右衛門が同類たるい程に。此婆と一所に寝いよ。とは言地と。立上りしが今生こんじやうの。別れにせめ庄九郎を召捕り。彼が白狀にて。半七親ふものゝ乳もなく。今から先の腰起きて御顔を差覗さぞけば三勝も。お通を一子に科なしと。地立寄つて半兵衛が繩にも。嗚や歎かん親々が。知らずに居目と仲上り。見れども親子隔ての關。日ほどけば四人が悦び。フシ夢ではなるが胴慾者くわむごい心いぢらしやと。何と千萬無量の思ひ。両手を合せ伏拜いかと伏拜ふせみ。コレく親父殿。いふ聲洩るゝ三勝が。思はず乳腹を握み。おさらば。おさらばといふ聲も。十内様のお情で。半七が命も助かりしめ。詞乳は爰にあるものを。飲ま敷くきに埋うむ我が家の内見返り。見返りいなう。地どうぞ命のある内に。留めしてやりたい顔見たいく。乳が地張死しに行く。フシ身の成る果てぞ哀れなて下され半兵衛殿と。あせるを聞いてるわいなうと身を震はせ。駈入らんもり。地半兵衛はつと心付き。詞この書十内が。詞ナニ半七は死に出たとや。關の戸に。空音そらねもならず羽拔鳥はねとり。親は置の文体ぶんたいでは。今宵最期と極めし半七。エ、遅かりし残念々々。役目なれば心外面そとに血の涙。子はやすかたの安から。宗岸殿も手分けして。行方を尋ねんサに任せず。夜明けぬ内に早やお行きやぬ。悲しさ迫る内と外。一度にわつとア早う。地くくと身繕ひ。フシ立れと十内が。花も實もある櫻井の。湧出づる涙浪なみ花江泉川はなゐづみ小きんをフシ流出ででんとする所に。地思ひがけなく表掟あてやはらぐ國の名も。大和五條のあか出す如くなり。地半七け齒を喰ひしより。詞ヤアく傍々かたぐ。善右衛門を殺ね染め。今色揚げし艶容はなぢかた。その三勝がめ。かばかり深き御情是非もなや勿體した科人しなび。茜屋半七。召捕つたりと呼言の葉を。爰に寫してとどめけれ。